

てこな・ミュージズ・ジャーナル

財団にある スタインウェイ

今回は財団にあるピアノのお話をしたいと思います。市川市文化会館の大ホールにはグランドピアノが三台、小ホールには四台、さらに行徳文化ホールに一台あります。この三箇所のいずれにも、スタインウェイD274があります。スタインウェイD274と言えば、ピアノを弾く人の憧れの楽器です。いつか自分の部屋に置くことを願って、演奏家を目指している音大生も少なくないかもしれません。

ちょっと古いピアノたち

市川市文化会館のピアノはいずれも開館当時からのものですから、すでに22年もたっています。でも使われるたびに調律し、さらに一年に一回は本格的なメンテナンスをしていますので、奏者の方々からの苦情はありません。ただし、ピアノはヴァイオリンと違い、名があっても、当会館小ホールのように使用頻度が高いと、まさに「寄る年波」には勝てないのが実情です。

市川のクラシック演奏会への評価は高まり、本当に多くの方がいらしてくださいますが、必ずしも黒字とは言えません。ですから、「年老いたピアノたち」は、調律師の力を借りて何とか「若返って」、おおいに働いてもらっています。

行徳文化ホールに注目!

そんな中で、「若くてぴちぴちしている」ピアノ、それも最高級のD274のスタインウェイが行徳にあるのをご存知でしょうか?まだ開館して3年しかたっていませんし、使用頻度もそれほど多くはありません。この素晴らしいピアノの存在を、もっとひろく知っていただき、演奏される機会が増えるのを願って、ちょっとピアノの歴史を振り返ってみましょう。

サロンには鍵盤楽器

音楽の発展は宗教と切り離せませんが、教会の外では、どの時代も、人々が楽しむ娯楽としての音楽がありました。貴族たちが集うサロンで人気を博したのは、旋律と伴奏の両方を、一人で奏でられる鍵盤楽器だったようです。ただ、弦をはじく構造の鍵盤楽器チェンバロには、音量や音質の変化が乏しいという欠点がありました。

メディチ家の楽器係によるピアノ

芸術史を語るとき、必ずその名が出てくるのが、イタリア・フィレンツェに栄えたメディチ家です。金融業で莫大な財をなし、今に残るイタリア文化はメディチ家の芸術擁護のおかげだというのは周知のとおりです。王家に子女を送りこみ、その勢力を全ヨーロッパに広げていました。芸術家を数多く抱え、芸術の発展に大変な貢献をした一族です。

市川市文化振興財団 文化芸術専門員 小坂 裕子

最初のピアノ

ピアノ作成に活躍したのもメディチ家の使用人でした。楽器係のクリストフォリはほぼ18世紀になるうとしている頃、ピアノ作りに成功しました。鍵盤数は54、長さは結構あって228センチ、幅は96センチ。やがて19世紀、エラール、ブロードウッド、プレイエルと、今にその名が残るピアノ製造業者が次々に出てきました。ショパンが愛したプレイエルはというと、長さ244センチ、78鍵でした。鍵盤が現在のように88になったのは19世紀も末になってからの事です。

スタインウェイのピアノ

19世紀のピアノ製造業者の中で注目すべき存在の一つがスタインウェイです。ドイツ出身の一族は、1853年にニューヨークでピアノ工房を開きました。金属フレームの構造や音響などの研究によって、楽器としての充実はそれまでにないものとなり、すぐに注目を集めました。それ以来、経営上の紆余曲折はあったものの、楽器としては150年以上、ホロヴィッツを始め、多くの演奏家たちに愛好され続けています。その最高のピアノD274が、市川市文化振興財団には三台もあるのです。

数字の意味

ちなみにD274の数字はピアノ本体の長さを意味しています。227、221とだんだん数字が減っていき、最後は155となります。中の空間の大きさが、楽器の音響を左右するというのはい言うまでもありません。ですから行徳文化ホールにある新しいD274、この素晴らしいピアノを響かせる機会がもっと増えればと、心から願っているのです。ピアノ・クリニック、あるいは、ピアノ・マラソン・コンサートもいいかもしれません。行徳文化ホールは、もちろん一般貸し出しも行っています。客席数は647人。ピアノの演奏会にはちょうどいい大きさです。お問い合わせは行徳文化ホール(047-701-3011)にどうぞ。

